

「GM農業は精神論的だ」

今回は2004年から09年頃にユカイな北海道のハンカクサイ連中が発言したことをご紹介する。理由をアレコレ言ってGM（遺伝子組み換え）はやるなと言う。チェリー・ボーイが大人の女のことをあれこれ、ガキ同士で空想にふけるようなものだ。答えは一つ、1979年に発売されたピンク・レディーの名曲、ピンク・タイフーンのサビにある「ウツ、やっちゃいな、やっちゃいな、やりたくなくなったら、やっちゃいな」だろう（笑）

と言うのはさておき、ある北海道北部の地域は**高学歴の酪農家**が集まり、農業の理想郷づくりに苦悩する日々のようなのだ。GMの安全性に関して否定的でない意見を持ち、さすが高学歴者の特徴である。バカではない……のだから、発言内容をよく聞くとGM農業は**精神論的にダメだ**という。

たとえば、地域のコンセンサス、空気、太陽、風、水などと数値化できないことを感覚的に表現することが、明らかに私のような凡人よりは長けていると感じた。

ただ見事に自爆テロを演じることもある。自分自身がGMの配合飼料を平然と牛に食べさせながら、北海

道でGM農産物を栽培することには「ダメだ」と物申す。これでは話のツジツマが合わない。もし酪農家が食べさせているGM飼料に何らかの問題があったら、その牛乳も当然何らかの問題があるということになる。輸入して食するものに怪しいと思うのであれば、国産の同じものでも怪しいとなるのは当たり前

の考え方である。ところがこのような酪農家は地産地消、国産安全安心などの天から降り注ぐ、新興宗教のようなお告げも大好きなようで、それでいて国産のGM飼料を否定できるのだから、私には到底理解できない。農政も国産飼料の原料となる牧草、飼料米にはしっかりと予算配分があり、今後、子実トウモロコシ、国産飼料用大豆にも配分することになるだろう。

牛乳に限らず、畜産と呼ばれる牛肉、豚肉、鶏肉等の生産者のほとんど、数字でいうと**99・9%の生産者がGMの配合飼料を使って畜産製品を販売している**の

道でGM農産物を栽培することには「ダメだ」と物申す。これでは話のツジツマが合わない。もし酪農家が食べさせているGM飼料に何らかの問題があったら、その牛乳も当然何らかの問題があるということになる。輸入して食するものに怪しいと思うのであれば、国産の同じものでも怪しいとなるのは当たり前

嘘つき野郎の末路を知っているだろ？

Vol.66



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

Illustration by Kazushige Akita

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール宮井の憎まれ口通信

だ。別の数字でみると輸入されるGMトウモロコシは1500万t、GM大豆は300万t、GM菜種は200万t以上で、それらから搾油された食用油はしっかりと生協の棚で一般消費者が購入し、搾油された後のミールは増量剤などの食用や畜産等に利用していることくらい誰でも知っている。北海道でGMではない（非GM）飼料を使って営

農していますと宣言しているのは、私が知っている範囲では3軒のみである。北海道では畜産生産者が数千軒、飼育頭数が100万頭を軽く超える現状で、非GMの配合飼料を使っているのは10軒もあるのだろうか。今ではこんなアホーはいなくなってしまうが、04年当時には平気で「私の牛にはGMのエサを使っているじゃない」と言っていて、飼料販売会社に確認してもらおうと、やっぱりね、となっていた。

もつとすごいことに北海道庁やホクレンなどは「**北海道の畜産製品は安全・安心**」と発言できるのである。一部の反GM組織に好きなことを発言させ、公聴会ではそのような連中を農業者の代表として召集する。**良識あるサイレント・マジョリテイと呼ばれるGM寛容派の意見を取り上げない**のは、戦後の左翼教育をより積極的に進めた北海道教育の成果なのだろう。

そのGM飼料を販売しているのは誰なのか?を考えてみよう。それは日本人であり、日本の資本の飼料会社であり、運ぶのは日本の資本の運送会社で、振り込まれるお金の資本も日本の金融会社なのである。嫌いな米国から輸入して売って、使わせ、畜産製品を生産させ、販売させ、加

工するのは良くて、その餌を作るのはダメ。やはりおかしいでしょ?

非GM飼料は15%程度は高い 経済的に経営が成り立たない

それほどGMに反対する生産者がいるのであれば、自分たちが使う配合飼料も非GMの配合飼料を使えばいいではないか、と考えるが、そこにはやはり高学歴者が嫌う単純な資本主義社会が存在する。

非GM飼料はGM飼料に比べて最低でも15%程度は価格が高く、乳牛1頭当たりの飼料コストは年間30万円、100頭クラスの酪農家だと年間3000万円に及ぶ。同じ規模で非GM飼料を使うと最低でも450万円ほど多く支払うことになる。さらに、配合飼料の50%はトウモロコシが原料で、残りの穀類、大豆かすやナタネかす、綿実かすなどのすべての品種を非GMで調達するには大変な労力が発生する。ほとんどの生産者はこの15%に対する付加価値にモガキ、苦しむのは勘弁してくださいとなるので、「**安全・安心**」なGM飼料を使うことになる。それでもGM飼料はイヤだと、こんな言い訳もしていた。「苦小牧、札幌では非GM飼料を簡単に購入できるけど、道北で非GM飼料の販売はしていない」

そのような明らかな嘘が通じるほど世の中は甘くない。稚内近郊でも非GM飼料を販売していたのだ。まさか彼が大嘘をついているとは信じられなかったが、非GM飼料を販売可能だった大手飼料会社に連絡してみた。「非GMの飼料を道北一円に販売可能ですか?」と尋ねると、担当者は明確に「できません」と答えた。実はこれと同じ会話を08年にした経緯があり、あの嘘つきGM反対酪農家は1年間も嘘を言い続けていたのだ(たぶん今現在も)。高学歴で厚顔無恥とはまさしく彼のことだろう。まっ、そんな個人攻撃をしても得るものはないが、コラム的に最高の配合飼料(エサ)を撒いていたことに感謝しよう。

どう考えても**非GM飼料は15%は高い**ので経済的に成り立たないというのが99.9%の事実であって、消費者の脇の下をくすぐる単語を羅列することで**米国などのGMで成功した農業を見下すのは間違い**である。

農業も産業の一つである。利益が出なければ、機械、土地、牛を新規購入することはできない。そんなことは中学生の私の子供でも知っている。そのような姿を子供たちに見せて、将来その子供たちがマトモな生産者になるわけがないし、なったな

なんて聞いたことはない。そうです、嘘つきの親からは嘘つきだと自覚しない、嘘つきの子供が育つのだ。そういえば「多少コストが高くて、ブランドや消費者の理解があれば、商売として成り立つ」って言うていたのは誰だったかな? 残念ながら、「嘘つき」のブランドだけでは消費者は振り向いてくれないようです。**未知の技術を否定するなんて聞こえはいいが、結局は昨日と同じこととして、何もしないんだろ?**

彼のような農業生産者が私よりは教育程度が高いのに、その力を発揮できない環境にいることは残念である。早い話、彼のような嘘つきかどうかを調べるのがない北海道の農政部で活躍できれば、決して金髪・ブルーアイとガチで口論できないチキン反米、嫌米、未来のない有機栽培農業推進に責務を負うことができるのに。

ところで先ほどの飼料販売会社について? 雪印種苗(株)の天塩営業所(0162-8243026)である。「非GM飼料を購入した酪農家は09年8月28日11時・30分現在、いますか?」と聞いたところ、明確に「ゼロ軒です」と答えた。嘘つきの末路を知っているのは、嘘つき野郎だけであってほしい。